寺林勝　兵庫県出石郡出石町内町五九　昭和五十九年十二月二日

勝林寺だより

『正信偈和讃』のこと

「正信偈」の百二十行にわたって二年がかりでそのおこころの大体をうかがってまいりました。

そこで今月からは、いつも「正信偈」のあとにあげている「六首のご和讃」をみんなであじわってみたいと思います。

「正信偈・和讃」として今のようにおつとめするようになった由来についてまず調べてみることにします。

いまのような「正信偈和讃」のおつとめが始まったのは親鸞さまからかぞえて八代目のご門主さま蓮如上人からとされています。

ではそれ以前はどんなふうなおつとめをしていたのでしょうか。

はっきりしたことはわかりませんが、どうやら浄土宗と同じ「六時礼讃」というおつとめであったようです。

「六時礼讃」というのは、一日を晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜との六時に分けその時時にとなえる「往生浄土を讃えるうた」である『六時往生礼讃』というおつとめを七高僧のなかの中国の善導大師さまがおつくりになっておりました。

浄土宗の開祖であり親鸞さまの先生であった法然上人はひとえに善導大師を継承されたかたですから、法然さまの一門では日々のおつとめとして常にこの『往生礼讃』がよまれていたはずです。

親鸞さまももちろん日夜このおつとめをなさつたことでしょう。

ところが蓮如上人の時代（室町時代）になると、真宗のご門徒は急に増えてまいります。お百姓などの一般庶民が蓮如さまのお念仏のおしえをしたって集まってきますと、当然その人々とも共にあげられるおつとめがのぞまれて参りました。

そこで当時、吉崎というところにいらっしゃった蓮如さまは、親鸞聖人のご著作『教行信証』六巻のなかから一番の中心部分である「正信偈」と親鸞さま晩年の作である三百五十首あまりの『三帖和讃』のなかの六首ずつをセットにしておつとめするようにすゝめられました。

「正信偈和讃」としておつとめの本も出版してくださいましたので、だれもが手がるにおつとめすることができ、そのおつとめを通してお念仏のこころに会わせていただけるようになったのです。

「正信偈和讃」をあげることをおすすめくださった蓮如上人は、おつとめをする心がけを次のように示してくださっています。

「正信偈和讃をおつとめしてその功徳をほとけ様や親鸞聖人にささげようとするのですか。それはとんでもないあやまりです。

他宗のおかたはおつとめの功徳をほとけ様に回向するのでしょう。しかし浄土真宗ではそうではありません。どうぞどうぞ如来さまのおこころを知ってくれよと願われて、親鸞聖人がそのこころで和讃をおつくりくださったのです。ことに七高僧のくわしい教えのおこころを日本のうた和讃になおして聞きわけられるようにとお作りくださったそのご恩をよくよく心得て、なんともったいないことよとお念仏を申しながらこの「正信偈和讃」をとなえさせていただくならば、如来さまのご恩徳を親鸞さまといつしにおろこばせていただくそういうおつとめになるのです。」（空善記）

昭和七・八年ごろであったかと思います。いま「行譜」とよばれている「正信偈和讃」の新らしい節が制定されました。当時はその節であげるおつとめを「新節」とよんでいました。

私の父はその一年ほど前に亡くなっていましたから、私に「新節」をおしえたのは母でした。

毎朝五時から母と二人でおつとめを習いました。

「しっかり大きな声であげなさい。小さい声ではもったいない。」と当時七つか八つの私を励まし教えてくれた母もそれから三年たって亡くなりました。

私にとってはですから父母のかたみのように思えるこの「正信偈和讃」のおつとめです。

次号からはまず平楽あげている「弥陀成仏のこのかたは」の和讃から次々にそのおこころをいただいてゆきたいと思いますが、ただ大事なことは、先の蓮如上人さまのおことばにもありましたように、「お念仏申しながら」あじわわせていただかねばなりません。

ですからおつとめとしてとなえるときには、和讃と和讃との間は高らかなお念仏でもつてつないでいくのです。

会

半時七つ夜会をいたします。ご存じのようにこの会は年に二十五日ずつ一年に集まりをもつております。

ふるってご参詣ください。

生かされて

生きるよろこびを
分かちあうよろこびこそ
まことの布施

ダーナ

除夜の鐘

過ぎた一年の感謝をこめて大晦日に寺でつつめる法要を除夜会といいます。

「正信偈」をお葬式の時のあげ方でおつとめします。その後「百八声の鐘」をつきますがこれは俗に百八煩悩を一つ一つかえりみるためといわれています。〇時に撞き終るという説と〇時から撞き始めるという説がありますが、煩悩を反省するという意味からすると前者がはんとうかと思います。

十二月のこよみ

一日　湯口昇司氏宅慰問・平田専福寺報恩講説教
二日　平田専福寺報恩講説教・庄川報恩講
三日　久畑・佐田報恩講・浮橋報恩講
四日　口栗尾報恩講・奥栗尾報恩講
五日　保谷報恩講
六日　太田・東里報恩講
七日　出合報恩講
八日　谷原逸雄氏宅法事
九日　北但三組住職寺族講座（光行寺）
十日　教務所へ出張・十六夜会報恩講
十一日　小田報恩講
十二日　小田報恩講
十三日　兵龍教区企画実務
十四日　奥小谷報恩講
十五日　住吉随行寺報恩講説教
十六日　同
十七日　中央連研講師研修会（本山）
十八日　基幹運動本部第二部会（本山）
十九日　同
二十日　兵龍教区教化推進協議会合同運動推進協議会（神戸）
二十一日　正法寺報恩講
二十二日　正法寺報恩講
二十三日　口小谷報恩講
二十四日　市場報恩講
二十五日　矢根報恩講・「みのりを聞く会」報恩講
二十六日　丸中・片間・はら山報恩講
二十九日　出石組十日講
三十一日　除夜会

私のお念仏

宮嶋千秋

忙しい日々をおくるなかで今年もまた年の瀬をむかえ、ご門徒の皆さん全員がめいめいそのご家庭で報恩講をつとめてくださる時期となりました。

お互いに忙しさのなかで、いろいろと愚痴をこぼし悩みながら毎日をおくっています。しかしそのことは、自分がそういうなかで生きているという証拠なのだとも思います。

おかげで忙がしく働けるというしあわせと喜びをあじわうことのできない方々も随分大勢おられるのに、私は忙しく働かせていただけるしあわせをもつたいないことだと思うことでございます。

自分の仕事があればこそ、また仕事をやりこなすからだに恵まれてあればこそ、毎日、ちょうど機械の歯車がまわるごとくつとめられるのでございます。

日曜日ともなりますとかえつて節度がくずれ、からだも心ものんびりしてたるんでしまいます。なまけようとするこころを、阿弥陀様が自分に仕事を与えてくださり、また、やらねばならないと励まし心をひきしめてくださつているように思えます。

自分が社会のまた家族のなかの歯車であるとするならば、自分だけ勝手にはやくまわるわけにはゆきません。また遅くまわることもできません。みんないつしよに同じようにまわらなければトラブルの原因となりましょう。

あせらず、なまけずに行きたいものです。そのなかで、笑顔ややさしいことばは丁度潤滑油のようなものだと思います。その油をそゝぐことを私はよく忘れているように思えてなりません。やがては歯車はとりはずされて、社会のまた家族のみんなの人にこやつかいにならなければなりません。

若いときからその用意をしておきたいものです

いろいろと思いますなかで、お聴聞させていただいてもいただいても、どうにもならない自分ではありますが、回を重ねるごとにお念仏と合掌のすがたがこの私のうえにも多くなるように思います。

阿弥陀様の、目には見えないが大きく広いお手まわしと思わずにはおれません。

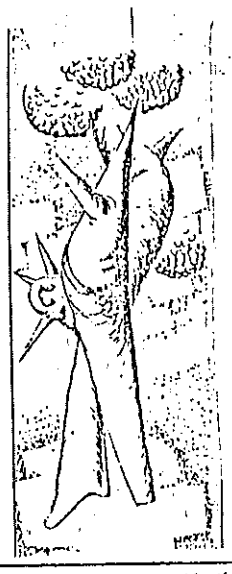
お念仏と合掌のすがたのなかのこころに、悪魔は住むことはできないでしょう。

一年のしめくくりとしての「報恩講」は、私たち真宗門徒のいちばん大切な感謝のいとなみ報謝のつどいであります。

末ながく伝え伝えてつゞけてゆきたいものだと思います。

南無阿弥陀仏。

忙しく働くことをしあわせと
知らせたまうは　弥陀のみ光。



そとに対して
かしこぶつたり善人づらをしたり、努力精進のすがたを現じたりすることは
おそろしいことだ。
そうすればするだけ
私のこころの内には
ごまかしとうそとが蓄積されてゆくから。

人のあさはかさばかりを見ている
私の　あさましさ。

往生

「すでに九十歳を越えられた親鸞さまは　その年の冬なかばごろからお床におつきでありました。それからは、ほかのことは一切おつしやらず、開えてくるお声はたゞお念仏ばかりでありました。そうしてその年の十一月二十八日　ついにお念仏の息がたえて、お浄土へお還えりになられたのであります。」

親鸞さまの伝記には、そのご臨終のありさまをそのように伝えています。

静かなご臨終と申しましょうか、ある人はあつけない終りですねえと言つた人もあります。

たしかに伝記をもつほどの名僧高僧の臨終としては、極めて平凡なあつけないほどの往生でありました。

たとえば法然さまがなくなるときには、光明がかゞやき紫の雲がたなびき、えもいわれぬ香りとたえなる天の音楽の流れるなかでのすばらしい往生でありました。

また日蓮さまは、天地とどろき振動するなか、普門品を高らかにとなえながらの堂々たる臨終でありました。

それに対して親鸞さまの死は、なんのへんてつもありません。たゞ静かにお念仏の息がたえたと記されているそのご往生は、しかしほんとの「往生」というもののありかたを身をもつて示してくださつたと申せましょう。

「往生」とは、如来さまの限りないいのちのなかに往き生れることです。

如来さまのよび声によびさまされて、そのなかで親と子とが出会えたそのよろこび。「……の名号を聞いて信心歓喜したその一念」のところに、わたしの往生は決定するのです。

いのちある間に私は如来さまの懐にいだかれた身。臨終のそのときに死にさまによつてわたしの往生は決定するのではありません。

「わたくし、目をとじたら、賀茂川に入れて魚に与えておやり」

それでよかつたのです。それが親鸞さまのご往生だつたのです。

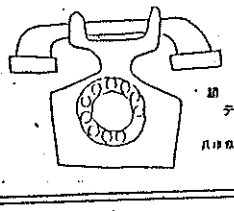
（勝林寺テレホン法話）

古たくあん

古たくあん煮

こんなおいしいたべかた

①古たくあんをきれいに洗つて千切りにする。
②①　しようががすりおろし、しよう油1、みりん1とであえる。
③「紫その実」。ごまを好みによつて混ぜてもよい。

(079652)
5800番
いつでも
どこからでも
ダイヤルしてみてください
電話で聞ける
仏教法話
毎月十日ごとに
法話がかわります。

作主真宗本願寺派
勝林寺
テレホン法話
兵庫県加古郡加古町内町五九